# バンコク冒険譚――のるかそるかの生還

池本　正純

バンコク滞在最終日、午後はフリータイム。やたら冒険心がうずく。もうこれ以上お仕着せの観光ツアーについていく気がしない（・・・この性癖が常に問題を起こす)。

ホテルからスカイトレインと地下鉄を乗り継いで一人で市内を回ろうと考えた。というのは、タクシーは渋滞に巻き込まれるとまったく動けなくなる。昨夜、夕食の待ち合わせ場所にタクシーで行こうとして「立ち往生」の経験をしたばかり。それは避けたい。30 分で 1 メートルも動けないなんてもう真っ平だ。今晩の夕食に出かける集合時間 7 時にとにかく間に合って帰ってこなければならない。

ホテル近くのサラデーン駅から乗れば、サイアム駅が見物や乗換えのキーポイントになる。しかしふと地図を見ると、宿泊しているホリデーイン・シーロムはチャオプラヤー川に意外と近い。フロントにいた女の子に聞くと、桟橋まで歩いてものの 10 分かかるかかからないかだという（実はこれが後から考えるとくせものでした)。

川からの風景が見ごたえあるのではという期待は、前日朝のタイ中央銀行訪問の際に抱いてはいた。王家ゆかりの建物であった中央銀行もその一つだが、ウオーターフロントにみるべき建物やランドマークは結構多い。「よし、行きは船に決めた！」

地図を握り締めわくわくしながらホテルを出た。午後の 2 時過ぎ、日はまだ高い。自分ながらいい選択をしたという期待感と満足感があった（・・・しかしこの後大変なことが待ち受けているとは予想だにしていなかった)。

目指すはサパーンタクシン駅近くの桟橋。タクシンブリッジのたもとなのですぐ分かるとのこと。シーロム通りが川に近づくと左にドッグレッグ、そこに地元の人々がたむろする街が突然現れた。見たことのないしかし不思議にひきつける食べ物が多種多様に小さな店ごとに並べてある。どれもうまそう。フルーツの店もある。ものすごく新鮮だ。季節はまだのはずなのになんとドリアンまである。並べてあるのはちょうどよい熟れごろで中身を割って見せている。ないはずのものがあったので、よっぽど買おうかと思ったが、これから歩き回ろうというとき、荷物になりそうなのであきらめた。食べ物屋のほかにはマンガの貸し本屋も見かけた。日本のマンガ本がいっぱいシリーズで揃えられていた。タイでも人気なのだろう。

歩道は人であふれ、雑多な小さな店の並びが港の近くまで続く。日本で見る夜店の屋台の感覚である。この活気に触れただけで嬉しくなってきた。そういえば、この旅の中で格式の高いレストランでタイ料理を何度も食べたが、一番感動したのは、チェンマイ滞在中バスで途中乗

りつけた街道沿いの「ぶっ掛けそば」であった。安くてうまいと地元の人間がこよなく愛している風なのが大変よかった。つい 2 杯も食べてしまった。

さてぷらぷらあるいているとまもなく港にたどり着いた。ここが下流のターミナル桟橋らしい。ワットプラケアに行きたいと言うと、並んで待つべき列を指示された。船賃が「えっ！？」と言うぐらい安い。確か 5 バーツ（もう記憶は正確でない)。そばに並んで立っている女子高生二人に英語で話しかけたが、笑うだけで通じた風ではなかった。船が彼女たちの通学の手段なのだということは想像がついた。船を利用するのは観光客だけではない。むしろ地元の人たちの貴重な足なのだ。やがて待っていた船が着き、乗船。それほど込んでいない。前寄りの席に座った。右岸も左岸もよく見える。吹き抜ける風が心地よい。有名なホテルや寺が近づいては通り過ぎる。次第に観光客がたくさん乗ってくる。

自分の感覚では 30 分あまり経ったころか、ワットプラケオでどっと人々が降りた。私もその人の流れについていった。港の傍はみやげ物を売る屋台が所狭しとひしめいている。周辺を散歩しながら寺を眺めていると片言の日本語で話しかけてくる人がいる。トゥクトゥクの運転手だ。もうワットプラケオの中に入る時間はおしまいだからほかの見物できる寺を案内してあげるという。渡りに船。地図を片手に交渉の結果、いくつかのランドマークを回って最後にパヤータイ駅まで送ってもらって 40 バーツ。「安い。よし乗ろう！」と後ろの席に着くが、走り出すと結構なスピード。運転も荒い。振り落とされないように必死で車体の一部であるパイプにしがみつく。

いくつかの寺や名所を巡ったと思ったら、宝石屋にいかないかと運転手が誘う。そうかこれがねらいかと気がつく。金がないというと、買わなくていいからとしつこい。結局、主導権は向こうにあるので連れて行かれたのだが、規模の大きいきれいな店で確かにいいものが置いてある。しかしどれも高い。交渉などしている暇はない。時間がないからと断り、すぐに退散した。

さて街の中の駅に向かって走り出して見ると街の様子がすでにおかしい。渋滞がもう始まっている。町の中心に入れば入るほど渋滞がひどい。時計は 5 時。「これは駅を目指すよりまた川に戻って船で逆戻りしたほうが早いのでは？逆方向の道はすいている。川に渋滞があるはずはない。」トゥクトゥクの運転手に方向転換してもらい川に向かった。やっとたどり着いたのはひなびた桟橋。金を払うとトゥクトゥクはすぐにいなくなった。

利用者らしい人気（ひとけ）がまるでない。「これは使われている桟橋なのか？」疑問に思い、少し戻って近くにいたおじさんに聞くが、言葉がまったく通じない。ただ、「船がそのうち来るから桟橋で待ってろ」ということは、ジェスチャーで分かった。30 分以内に船が来れば十分間に合う時間だとは思った。しかしこの港はなにか変だという心の不安は消えない（実際その悪

い予感は的中する)。

しばらく待っていると二人の若い地元の青年が桟橋に来た。幾分ほっとした。利用者がいることが確認できたからである。幸い一人は少し英語が通じる。自分は下流のタクシンブリッジのところへ 6 時半までに戻りたいのだというと彼は首をひねった。

「この桟橋に着く船はのろいローカル便でたくさんの桟橋に寄りながら下るので 1 時間以上はたっぷりかかる。」

「えーっ！！では早く行くにはどうしたらいいんだ？」

「エクスプレスが発着する桟橋に行かなければだめだ。」

「それはどこにある？」

「ほらあの向こうに見えるだろ」と指差したのは、なんと数キロメートルも先の遠いところ。桟橋らしきものが小さく見える。歩いてなんかとてもいけない。

「行くとしたらモーターサイに乗っていくしかない・・・」とつぶやいたかと思うとその若者、後ろを振り向いて小走りに近くにいたおじさんのところに近寄って一言二言。そしてすぐ戻ってきた。「この人がバイクの後ろに乗せてくれて、あの桟橋まで連れて行ってくれるから。向こうについてから 20 バーツおじさんに渡してよ。」なーんだ、さっきのおじさんモーターサイの運転手だったのか。

いくら冒険してみたいとはいってもバイクの後ろにだけは乗るまいと思っていたのだが、背に腹は代えられない。四の五の言っている暇はない。バイクの後ろに跳び乗るとすごいスピードで走り出した。車と車の隙間を縫うように右や左へマヌーバー。あっという間に目的の桟橋へ。約束の 20 バーツを渡しありがとうと握手して急いで桟橋に駆けていくとなんと船が着いたところ。あわてて船に飛び乗ると、船は待ちかねたように岸を離れた。

危ういところでセーフ。これでどうにか間に合うだろう。ほっと胸をなでおろした。いくらか心に余裕が回復して来たころ、右手対岸にワットアルンが見えてきた。夕日を背後から受けた姿もまた美しい。

エクスプレスとは言いながら、上りのとき以上に寄る桟橋の数が多い。上りで降りたところよりはるか上流まで来ていたのだ。結局タクシンブリッジのたもとについたのは 6 時 40 分。あたりはもう薄暗い。急がないと間に合わない。桟橋を上がったところで何台かモーターサイが待機している。一度経験したのでもう気後れはしない。一台と交渉してみた。ホテルまで 35 バーツ、負けられないという。さっき 20 バーツを経験しているので「高い！」との印象が捨てきれず乗るのをやめた（後から思えばたったの 140 円、なんと言う貧乏性！）。

とにかく速く歩こう。それほどの距離ではなかったはず。しかし歩けども走れどもなかなかたどり着かない。なぜかすごくしんどい。考えてみれば当たり前だ。川に向かうときは下り坂、

ホテルまでの帰途は緩やかとは言いながら上り坂。のんびり川に向かうときは気づかなかったが、あわてて逆に歩くとすごくこの位置エネルギーが負担だ。心理的にも川に向かうときとは大違いで、歩道の人ごみが邪魔でしょうがない。人垣掻き分け、大汗を掻きかき、ぜいぜい言いながらやっとホテルに着くと、約束の 7 時ちょうど。みなバスに乗り始める直前だ。「間に合った！」

村上事務局長が「まだ二人の福島さんが戻ってきていないんだけど・・・どうしよう？」

すかさず私は言った。

「文学部の福島さんがついていれば問題ない。彼は地獄からでも生還する男だ。どっかでぶらついているんだよ。連絡がないんじゃいつまで待っていいのか分からない。約束の時間だ。出発しようぜ。」

何という冷たさ、というか、自分の危うさをさておいてよく言うよ！かろうじて間に合った者のおごり・高ぶり以外の何ものでもない。確かにその通り。でもあの時は言ってみたかったのよねー。とにかく思いもしない冒険の果て、幸運に恵まれながらも、しんどい思いをしてやっと間に合って帰ってきたんだもの。

「二人の福島さん、ごめんなさいねー。」

でも置いていったはずの福島さんたちいつの間にかレストランにたどり着いていたね。やっぱりどこからでも生還するんだね。